

ニューズレター

第8号

特集 「 ダンスの応用領域逍遥 」

目 次

この時代におけるダンスのチカラ

「 アート、教育、セラピー、そしてコミュニティーダンス 」

佐分利育代 （鳥取大学名誉教授）

2

私の研究テーマ

「『創造的身体表現遊び』－共に生きる場を共に創る－」

大橋さつき（和光大学 現代人間学部 准教授）

3

「健康増進の視点からダンスについて考える」

佐藤文音 （筑波大学大学院博士後期課程）

5

あの人にこの質問を

竹中幸子さん （「ベストプレイス」主宰）

「人と関わることは動きそのものの創出」

インタビュー・構成 八木ありさ

6

舞踊学会 第20回舞踊学会定例研究会のお知らせ

12

掲示板

13

事務局便り

14

編集後記

14

この時代における ダンスのチカラ

「アート、教育、セラピー、そしてコミュニティーダンス」

佐分利育代（鳥取大学名誉教授）



イギリスにおけるコミュニティーダンスは第2次世界大戦後に始まったとされているが、鳥取県にある「因幡の傘踊り」はそれより40年も早い、日清、日露の大戦後（1906※）に、疲弊した村を立て直すために考案されたコミュニティーダンスであった。

鳥取県警察本部発行の『警友とっとり』45号（1961）には、「因幡の傘踊り」の考案者である山本徳次郎（国府町高岡）の当時の様子が、『切手になった傘踊り秘話』として書かれている（pp. 42-50）。筆者は、鳥取署次長の小枝香とある。それによると徳次郎は、雨乞い踊りとして踊り伝えられていた冠笠踊りを元にして、この踊りを長柄の傘向きに改善することに取り組んだ。そして、誰がどこで教えても間違えることのないようにと、かな文字振り付けに至った。「おどれ日本」「わがむらのひかり」「まもれそら」という、徳次郎が念願とする農村復興を願った文句を、舞踊譜にした（小枝は『おどり譜』としている）。彼の考えに賛同した青年たちが集まって練習し、旧暦6月30日、高岡神社夏祭りに奉納、公開された。小枝は「彼の悲願 “ 没落していく青年達の善導策 ”・・・の誕生」としている。「因幡の傘踊り」は、直径115cm、全長160cmの長柄の装飾傘を手にした12人程の男達によって、因幡大津絵、因幡おそ節などの歌に乗せ、勇壮に踊られる。

欧米では、非行青少年や、貧困な地域の人たちにダンスが指導され、一緒に踊る人とのあるいは自分自身とのコミュニケーション体験を通してのコミュニティーづくりに成果を上げたと聞く。我が国でも障

害のある人となない人、生活環境の様々に異なる人同士、学校教育以外の場所での子どもたちへのダンス指導が、アートとしての体験だけでなく、互いを理解し、活かし合う体験としての意味も担いながら行われるようになっていく。

私も、鳥取という地域で知的障害の人とのインクルーシブなダンスや、作業所に通う精神障害の人たち、重度身体障害施設の利用者ともダンスする機会を持っている。10年経ったインクルーシブなグループは、新しく参加した人の心を開く力を発揮し始めた。精神障害のある人の中には、作業所を休んでも、ダンスにはCD持参で来る人がいる。5年目の昨年（2014）には統合失調症をテーマとした作品も創って発表した。重度身体障害の施設では、スタッフ対自分という1対1での関係がほとんどだった人たちに、利用者同士の関係が生まれた。どれをとってもダンスは不思議なエネルギーを参加者に与えてくれる。

平成23年1月に、鳥取県倉吉市にある公民館の地域づくり講座「隣のDAI学校」で、60歳以上の22人と、初めてのダンスを共にした。これには作業所の一人が助手として参加してくれた。円になって隣の人に「ラップの芯」を渡すという始めの活動で、彼は私の次にいて、『受け取り、渡す』を次に伝えた。助手のおかげで、動きを通した『享受と表現』というダンスそのものの体験を含んだいつもの活動がメンバーを回った。経験は異なるグループとのダンスで活かされ、社会と繋がる手がかりにできる。

年令の高い人の人生経験は、イメージ豊富なダンス活動を生む。ラップの芯も、覗き眼鏡、釣り竿、刀など様々に変身した。ラップの芯を参加者一人にひとつずつ渡し、一人でできること、二人での動き、5・6人グループでできることも探してもらくと、向かい合った女性に、社交ダンスのステップを教える男性も現れた。グループで円になり、「回ろう」「集まって」「裏返る」「手をもっと挙げて」と、提案の飛び交う大変な騒ぎのダンスになった。講座後の感想は、「座って話を聞くだけの講座と違い、交流できたのはよかった」「楽しかった」「気分がすっきりした」など、地域づくり講座(コミュニティダンス)としてはまずまずのものだった。一人の男性が、「こりゃええわ、肩こりが治った」と帰り際に肩を回した。肩こりの無いすっきりした気分を味わうことができたセラピーや、健康講座としての効果もあったらしい。

イメージを持つことで、四肢に麻痺のある人が大きくなめらかな動きで踊り、視覚障害のある人も体の形の変化を伴って踊る。知的障がい者が「これは

僕が出した動き」と主張する。ダンスの体験には自己革新の楽しさがある。しかし同時に自己と対峙せざるを得ない厳しさもある。体の範囲を越えた空間やグループ全員の動きを、自己の延長として感じながらイメージの世界に浸ることができるが、そのエネルギーが生まれないもどかしさもある。心と体の境目が分からないような動きを受け取り渡し、どこからがアートで、どこからが教育で、どこからがセラピーか、コミュニティダンスは何なのか、ジャンルの分からないダンスを様々な人と踊る時間は楽しく味わい深い。

(※ 因幡の傘踊りの創始年には諸説ある。小枝は明治32年(1899)としているが、日露戦争後の明治39年(1906)、「若者の頭」をしていた満27歳の徳次郎が、若者達をリードしたとの見方が有力である。)

私の研究テーマ

「『創造的身体表現遊び』－共に生きる場を共に創る－」

大橋さつき (和光大学 現代人間学部 准教授)



「私の研究テーマ」を遡ってみたら、高校の図書館で写真集『NUBA』(パルコ出版局)を見つけた時の衝撃が蘇ってきました。ヌバ族の躍動感溢れる身体とその写真を撮った女性レニ・リーフェンシュタールの経歴に鳥肌が立ちました。漠然としかし確実に、ダンスや身体表現の奥深さに心を奪われた瞬間でした。

大学では期待通り、踊り三昧の日々でした。障がい児へのダンスの活用に興味を持つと、石黒節子先生がゼミの先輩である八木ありさ先生のダンスセラピーに関する論文を読ませてくださいました。舞踏家岩下徹氏が実践するダンスセラピーの現場でも貴重な経験を得ました。寝たきりの青年が声をあげ指先を動かし岩下氏と即興的に繰り広げたダンスの美しさに心が震えました。

修士論文で欧米のダンスセラピーに活用されている動作分析法「Kestenberg Movement Profile」につ

いて調査し、Loman, S. 氏による自閉症児を対象とした実践を知りました。1997年には、アメリカNH州 Antioch New England Graduate Schoolのダンスセラピーコースで主任を務めていたLoman氏の指導を受け、言葉によるやりとりが十分でない障がい児に対してダンスによる支援が有効であることを実感し関心を高めました。

しかし同時に、文化差や教育支援制度の違いを肌で感じ、日本における適用に向けては、近接領域まで対象を広げて検討する必要があると判断し国内の実践を調査しました。その中で運動遊びを軸とした発達支援法である「ムーブメント教育・療法」に出逢いました。2000年の五月晴れの日初めてムーブメント活動を訪れると、河川敷で様々な障害の子どもたちを含め大勢の人たちが笑顔で土手すべりをしていました。葉っぱをいっぱいつけたおじさんが「やあ、いらっしやい！一緒にやりましょう！」と

手を伸ばしてくださり、それがムーブメント教育・療法の祖Frostig, M. の理論を日本に伝えた小林芳文先生でした。場に吸い寄せられ夢中になって参加したこの日の衝撃を今でも鮮明に覚えています。

その後、ムーブメント教室に携わるようになり実践の中で育てていただきました。障がい児の運動能力に関する縦断的調査やアセスメントツールの開発研究にも取り組み、ムーブメント教育・療法による発達支援について考察を深めてきました。次第に元々の専門であるダンスを活かしたプログラムの開発を試み、より創造的でドラマ性のある活動を共に創りあげていくという特徴が現れ始めました。ちょうど和光大学の専任となった頃で、ダンスや舞台表現に興味関心のある学生たちが貢献してくれたと感謝しています（『特別支援教育・体育に活かすダンスムーブメント』, 2008, 明治図書）。さらにこの十年は、障がい児を取り巻く状況が大きく変化し、「発達障がい児」と呼ばれる子どもたちへの対応が求められ積み重ねてきました（『発達障がい児の育成・支援とムーブメント教育』, 2014, 大修館書店）。

現在は、ムーブメント教育・療法と身体表現活動を基盤にした独自の実践を「創造的身体表現遊び」と名づけ、その特徴や効果を明らかにするために実践研究を重ねています。今あらためて大事に考えていることは、発達や障害を個の能力開発だけに焦点をあてて考えるのではなく、「場」の中、「関係」の中で捉えること、「共に生きる」力を育むことの必要性です。「創造的身体表現遊び」による発達支援は、「～のために」遊ばせるのではなく、一人ひとりが主体的にかわりながら育つための環境として遊びの場を共に創り出す、漸次的で循環的な営みであると考えています。

さらに、発達障がい児の支援においては家族のQOLを高めることが重要で、科研費により親の幸福感を支

えることを目的とした実践研究に取り組みました。自身も母親になったからこそ見えてきたこともあり、引き続き研究テーマとしたいと思います。また、幼少期の子どもたちを対象に親子遊びとして実践してきましたが、最初にかかわった子どもたちが成人するようになり、年齢に応じて没頭し主体的に取り組むことができる活動が必要であると感じてきました。既に、青年期支援を目指した舞台表現活動の可能性を探っていますが、学校教育の現場、特に体育における適用と合わせて検討したいと思っています。

また、子育て支援、地域支援としての展開もあります（『遊びの場づくりに役立つムーブメント教育・療法～笑顔が笑顔をよぶ子ども・子育て支援～』, 2010, 明治図書）。東日本大震災以降は科研費により、特に原発事故影響下の地域における子ども・子育て支援として、室内遊びのプログラム提供や支援者養成に取り組んでいます。このような活動を通して、「創造的身体表現遊び」は、地域の人々が共に支え合い育ち合う相互的な関係を活性化し、地域の子育て環境を変容させ、コミュニティの再構築を促す働きがあると実感しています。引き続き実践研究に挑みたいと考えています。

図書館の写真集との出逢いから、自身が感動したことに導かれ新たな出逢いを得て今があると感謝しています。「専門は、ダンス？、ムーブメント？」と聞かれ、どちらを選ぶべきか悩んでいた頃もありました。しかし、子どもたちや家族、学生や地域の人々との共に活動する中で融合され、ようやく「創造的身体表現遊び」という形が見えてきたかなと感じています。Frostigは、他の研究者の業績、発見を自分の研究の参考にすることを恥とせず、子どもたちの支援のためによいと思うことはどんどん取り入れ、積極的に「折衷主義」を貫いたと言われています。尊敬する彼女の姿勢を見習って努めていけたらと願います。

私の研究テーマ

「健康増進の視点からダンスについて考える」

佐藤文音 （筑波大学大学院博士後期課程）



ダンスの稽古場に向かう時、いつも心身が良い状態にあるとは限りません。中学生の頃、私は学校で友達と喧嘩をし、鬱々とした気分で稽古場に向かいました。稽古を終えた帰り道、私は自身の心身が行きと全く異なっていることに気付きました。鬱々としていた気分は高揚し、スカッとした気分に、肩を落としていつもよりダラダラ動いていた身体は、胸を張ってシャキシャキ動くようになっていたのです。この変化に気付いた私は、「ダンスによって、人々の健康状態を改善させることはできないだろうか。ダンスを治療やリハビリテーションに役立てられないだろうか。」と考えるようになりました。中学生の頃のこの体験が、私の研究の原点になっています。

大学生時代、私はダンス／ムーブメント・セラピー（以下、DMT）に関心を持ち、学外で開催されるDMTのセミナーや病院でおこなわれるセッションに通うようになりました。卒業論文では、DMTセラピストにインタビュー調査を行い、DMTの特性、日本におけるDMTの現状や課題について検討しました。インタビューの中でセラピストは、アメリカDMTの母と呼ばれるMarian Chaceについて、彼女の精神は「共感」であったと説明し、これがDMTの根底にある精神だと語っています。ここでいう「共感」とは、他者の姿をありのまま受け入れるということであり、セラピストは患者がどのような動きをしようとして、どのような文化的背景を持っていようと、それら全てを含んだその身体やその動きを受け止め、尊重してセッションを展開していくということです。私は、動きを通して他者に共感し、存在を受け止めることが可能であること、こうした関わりこそがChaceの精神であり引いては心理療法としておこなわれるDMTの精神であることを学びました。

大学院に進学した私は、病院で行われているダンス活動にアシスタントあるいは指導者として参加するようになりました。大学院の恩師である柴眞理子先生は、茨城県に所在するみやぎきホスピタルにて、精神科の入院患者を対象に「創造的自己表現」

を目的としたダンスの活動をなさっていました。修士論文では、この活動に参加する作業療法士と患者のダンスを事例として、彼らがどのように自分を、あるいは相手を調整し、ダンスを展開しているか検討しました。彼らのダンスについて検討する際、私は乳幼児精神医学者であるD. N. Sternが提唱した「つかの間の輪郭」に依拠し、作業療法士と患者は、自己あるいは他者の動きが持つつかの間の輪郭を感じとり、相手の内的体験を受け止めてダンスを展開していると考察しました。つかの間の輪郭とは、人のあらゆる行動の形式（form）の中に存在し、動きの「いかに」に当たる概念とされています。人は、他者の動きがいかにおこなわれたか（例えば、他者がいかに微笑んだか、いかに椅子から立ち上がったか）を感じとることで、すなわち、動きが持つつかの間の輪郭を捉えることで、他者の内的体験（生気情動）を共有するとSternは述べています。修士論文では作業療法士へのインタビュー調査から、作業療法士と患者はその日のダンスのテーマ（指導者から提示されるイメージ課題）から連想するイメージや感情を、つかの間の輪郭によって相手に提示し、共有していることが示唆されました。インタビューの中で作業療法士は、「強い風」を表現する時には素早く手を動かし、「静かな風」を表現する時にはゆっくりと手を動かすことで、患者に自身の風のイメージや生気情動を伝えていると話しました。つまり、彼はつかの間の輪郭によって、自身の内的体験を患者に伝達しようと試みていると言えます。作業療法士は共に踊っていた患者について、他者から言葉をかけられてもその意味内容を理解する事が困難であると話しています。しかし、患者は、作業療法士の動きが持つつかの間の輪郭を捉え、そこに込められた意味を理解できることが明らかになり、その結果「強い風」や「静かな風」を一緒に踊り始めることが示唆されました。言語的コミュニケーションが困難であっても、つかの間の輪郭を通して他者と内的体験を共有でき、他者と交流することができる、「共にある」という体験ができる。病院でダンス活動を行う意義の一つとして、こ

うした点が挙げられると私は考えています。

大学生、大学院生時代と病院でおこなわれるダンス活動について研究をしてきた私は、お茶大の恩師である柴先生の御退官に際し、新たな学問領域から高齢者の健康について研究する決断をしました。昨今、ダンスを踊ることが高齢者の身体機能や認知機能に好ましい影響を与えることが明らかになってきました。高齢者の健康増進について研究する者の中には、ダンスに期待を寄せる者もいます。しかし、まだ課題は山積し、検討されていないことが沢山あります。現在私は、病院での活動を続けながら、柴

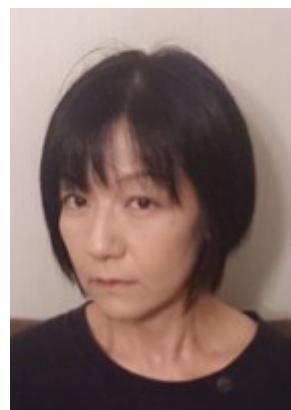
先生の門下生と共に特別養護老人ホームでダンスプログラムを開催しています。今後は、ダンスを踊ることが高齢者を始め人々の健康増進にどのように寄与するか、実践と研究の両面から模索していきたいと考えています。時間をかけて、健康増進という視点からダンスの可能性を探っていきたいです。

あの人にこの質問を 第8回

「人と関わることは動きそのものの創出」

竹中幸子さん（「ベストプレイス」主宰）

インタビュー・構成 八木ありさ



——同級生にインタビューをさせていただくのは、嬉しくも気恥ずかしい思いになります。大学入学の時に会って、30年以上もの間、つかず離れず友だちでいて、時々共に何か創り出せるって、すごいことだと思っています。

学生時代から変わらぬ思いってありますか？

竹中：すべての人に踊りはあるだろうな…あっていいはず…とは思っていた気はします。

——松本千代榮先生の弟子であることの影響は大きい？

竹中：思いがけず、大きい。

——どんなところでそれを感じますか？

竹中：今でも、なんで私がダンスをしているのだろうと思うことがよくあります。全くダンス未経験で入学しダンスが大嫌いな時期が続き、ほぼその状態で卒業したんです。同級生の八木さんはよくご存知。そんな私が今踊っている、その原点は松本先生の運動課題学習でした。走って止まるだけでもいいんだな～と思いました。もう一つ、人を育てる時に一番大切なことは「待つこと」とおっしゃったこと。深く考えたことはなかったんですが、そういえば、私は随分、待ってしまう人間のようにです。ひょっとしたら遺伝子かなと思ったりします。おこ



がましいですが。

——昨年の7月に、ベストプレイスの定期公演を拝見しました。松本先生や学会理事でこれまた同級生の岡本悦子さんとのコラボ作品もいくつかありましたね。松本先生は本当に豊かによりこびを表現しておられた！

ベストプレイスでは毎年7月にパフォーマンスをされるようになって10数年とか。現在は今年の発表会にむけて、ご準備に余念がないところでしょうか？

竹中：はい、苦しみのまっただなかにいます。どうしましょう…

——「ベストプレイス」について教えて下さい

竹中：「ベストプレイス」は埼玉県北東部加須市周辺を拠点に活動しているダンスグループです。1年に1回の舞台公演を目標に、毎月2回の定例ワークショップを行い、活動は16年目に入りました。

メンバーには、障がいを持った子供とその家族、ダンスに興味のある方、障がいを持った方との活動に興味のある方など、10代から70代の男女が20名ほど集まっています。

——コミュニティーダンス、インクルーシブダンスなど、地域での活動ということや特色ある構成メンバーであることを考えると、類似の実践形態があるようで



すが、ベストプレイスはどういうもの、と紹介したらよいですか？

竹中：それぞれのグループにはそれぞれの特色が色濃くあると思います。どのグループもそのグループの想いや、ダンス観や、スタイルがありますよね。例えば八木さんや私の同級生に西洋子さんがいますが、彼女の活動はスケールが大きく、新しい視点での活動の工夫や、多様な人々を繋いでゆく手法等、本当にすごいと思います。ただ、自分たちも同じように取り組めるのかというと、それは無理ですし、また違う感覚なんですね。

「ベストプレイス」の活動は、常にすべての人に開かれた活動であると認識しているのですが、一方で、文字通りゼロからたちあげた活動ですので、その時、そこにいる構成メンバーの意識が強く反映されている、というのが最も実際に近い説明だと思います。

——ゼロからの立ち上げということでしたが、グループ発足のきっかけはどのようなことだったのですか？

竹中：アダム・ベンジャミンのワークに参加したことで、私でも踊ってもいいのかなという気持ちになりました。当時、自分が踊るためには、誰かが必要でした。地元で自分が踊る仲間を欲していたことがきっかけだと思います。なんて自分勝手なのかしら（笑）。

はじめは、少人数でとりあえず集まってみようか、という簡単な気持ちで始めた活動だったのです。それがだんだんと「こんなことは大事にできたらいい」が「大事にしよう」そして「これが大事にしていきたいもの」へと、ごく自然に、無意識のうちに、グループ

として目指すものを持ち始めているように思います。グループというものはどうやら生き物のように変化していくものだという感を強くしています。

——グループの成長に伴って、はっきりとした方針が生まれたと言うことでしょうか。

竹中：成長というか、意識の変化がそうだということであって、どうしても譲れない軸のようなものは元々あるんです。

このグループは福祉的レクリエーションや健康増進を目的にしているのではなく、アートとしての可能性を探ろうとしている、ということです。創作の場に障がい者を含む多様な人がいるということは、様々な困難に出会うということなんですが、しかし、困難は、まさに大きなチャンスとも言えるものなのです。

特に健常者にとっては、困難に出会うことによって、それまで陥っていた、自分のかたよった常識を反省したり、それを乗り越えようとしたりするところに新しいアイデアが生まれます。そういった時に、真摯な姿とそれに伴う作り物ではない真摯な動きが生まれてくる。そのような瞬間を目にして、それがどれだけ美しいかを感じた時、これがアートでなくて、何なんだろう？と思い、その場にその人が存在していることに心から感謝するんです。

アートの場においてなら、互いにそこにいることを感謝しつつ、共に生きることを示してけるのではないかと、さらにそこに美しい瞬間があるのなら、それを提示してもいいのではないかというのが、ベストプレイスの活動の軸なのだろうと思います。



——なるほど、ダンスは心身の健康に良い、あるいは、自由時間を自己表現や交流のために有効に使う、というような考え方ではなく、頭からつま先まで、アート、つまり新しい価値を実現することそのもののなかに意味がある。

——実際の活動は、どんな風に進むのですか？

竹中：「ベストプレイス」のメンバーには、いわゆる舞踊経験のある人はほとんどいないのです。代表を務める私自身、特筆すべき舞踊経験があるとはいえません。かといって、指導者が他にいるというわけでもなく、さっきの「軸」を頼りに、皆でそれぞれのベストプレイス、つまり最高の場所を探り続け右往左往する、というのが実際です。

まず、決まった振り付けを踊るのではなく、一人ひとりを活かした即興的なダンスが主となります。本番の舞台でさえ、舞台に出てこれなかったり、いるはずのないところに出現したりと、何がおきるかわからないので、参加する誰にとっても即興の技術は必須なんです。

——即興の「技術」ですか？

竹中：そう、それぞれの動きはどこからたちあがってくるのかを知って、これを活用できること、とでも言えるでしょうか。

私たちがよりどころの一つとしているのは、「感じる」ということです。すぐそばにいる人、遠くにいる人と感じあって動く、コミュニケーションしていくことはもちろんですが、実際にコンタクトしたり、見





つめあったりするだけではなく、その人を包む周辺の空気や気配、光や音…自分を取り巻くすべてのものを感じながら動くということです。

——感じながら動き、境界や新しい価値にぶつかるところに表現が立ち上がる…ジャンルで言えばコンテンポラリーや舞踏などで語られる言葉に似てきますね。

竹中：そうおっしゃられると、自分たちがすごいグループのような気がしますが（笑）。まじめな話し、さらに空間を広げて、宇宙全体とつながっていく感覚を身につけることができれば、各自に確かな存在感が生まれてくるのではないかと思います。そのためには、周囲のみならず、自分自身をも敏感に感じるからだを持つことが大事になってくる。具

体的には、できるだけ自分のからだをこまかく認識できるように訓練を続ける必要があると考えています。細かなからだを持つことは、より広く、未知の空間に漕ぎ出せる可能性につながっていくのです。

——細かなからだへ向けての訓練は、ダンスのレッスンとは異なるのですか？

竹中：そうですね。日常生活の中で、自分のからだはどう動いているか、どこを動かしたかを意識していくことが訓練の一つになるのではないかと思います。

また、私たちのワークショップでは、「できる範囲で」「好きな場所から」「自分のタイミングで」との声かけが多いです。メンバーは自分のやることをその場その場で自ら選び取り、「からだ」や「動き」を自然に身につけつつあるのではないかと思います。

——では、そのようにして生まれる「ベストプレイス」の動きの特徴というものは、…そういう風に括ってよいものか分からないですが、ありますか？

竹中：先ほども少し触れた真摯な動きということでしょうかね…。





舞踊経験のない人が自分をさぐりながら戸惑いながら動く姿にぞっとするような美しさを感じることがあります。その瞬間というのは、たとえそれがビギナーズラックだとしても、揺るぎのない切実な動き。だとすれば、自分に真剣に向き合う状況をなんとかして創り出していか、能動的に自分から自分に向き合う状況を作ることができれば、舞踊経験の有無にかかわらず、謙虚な美しさを生み出せるのではないだろうかと思うんです。幸い私たちには、障がいを持った仲間が存在する。彼らのおかげで、私たちは常に真摯にならざるを得ない状況を与えられているわけです。毎回のワークの場でも、リハーサルでも、本番でも、チャンスはたくさんころがっている。

こうして考えてみると、このグループが障がいのある人のためにあるのではなく、彼らによって気づき、活かされているグループだということを改めて認識させられますね。動く…という観点から見れば、障がいのある方から学ぶこと、彼らによって引き出されるものは実にたくさんあることに気づきます。時には、意外性というプレゼントをもらえることもある。

——今のお話の「互いに学びあうことがある」という点について、もう少し説明していただけますか？

竹中：それは「認めあうこと」と言い換えてもいい気がします。ダンスの場において、認め合う…ということは、お互いの動きを動きとして認め合うことであると思うんです。特に普段は見落としがちな小

さな動きや日常的な動きを「動き」として認めること。

そして何より大切なことは、そこに心が震えるような瞬間、美しいと思える瞬間を見出していくことだと信じています。他者に対しても自分の中においても。

「自分がここにいていいんだ。何をしてもいい。」という安心感や自己肯定感は小さな動きを認めていくという、現実的なところから生まれてくるのではないかと思うのです。

——おお、自己肯定感ですね！？ 私自身は、ダンス・セラピーの理論と方法に関心を持ってこの30年間で過ごしてきたんですが、ダンス・セラピーの中で自分が感じている事も重要だなと、お話を聞いていて思いました。芸術的価値を目標にしないけれど、その時、その場に居合わせる人々の作り出すダンス、それは具体的なストーリーを持ったイメージ表現であることも、とても抽象的なエネルギーの波形であることもあり、全く多様なのですが、その現象の中に自分が受け入れられていると感じるのと同時に、これらすべてを自分の事として感じているように思います。その時間は自分の中に、震えるような美、として刻まれている。我田引水で申し訳ないけれど、私自身も自己肯定感を求めて、ダンスしてるんだなと。

竹中：ああ、八木先生（笑）、私は昨年、先生のワークショップを受けさせていただきましたが、その時「あ、この人は自分と同じような視点でダンスを見ているんだな」と、思いましたよ。そして、それが嬉しかった。

——ここまで思い返して、美的体験の前では、例えばセラピーかどうかと、境界に神経を尖らすことは必要ない。学校ダンスも同じなのではないかなと、すこし乱暴ですが、思うのです。

学校教育の中でのダンスの価値がうまく表現されている文章があるので、ちょっと長くなりますが引用しますね。

「ダンスの学習では、一人ひとりの異なった経験から得られる小さな知恵・感性を出し合い、自分たちが求める新たな像を生み出していくことが重要であり、またそのことを特徴としている。一人ひとりがみんな

違うという認め合いから出発し、異なった個性の全員が共に運動を楽しむためにはどうしたらよいか、仲間と生きる体験を通して学習を創り上げていくことを原理とするのである（細江文利，1999，「期待されるダンス教育の役割」『女子体育』41-2：4-7）」。

なんだか、学習とか、教育を外して考えてみても、とてもよいと感じるんですが、これ。

竹中：ええ、とてもいいですねえ。わたしも学校における舞踊教育に思いを馳せる時もあるんですよ。

この文章は確かに言い当てているように思います。八木さんは、どのあたりに共感を？私は前半部分が特に素晴らしいと思いました…。これについて語ったらきっと紙面がたりないのでは？また、ゆっくり話しましょうよ。幸い同級生だから。

——私も特に前半です。そうですね、ダンスの中で生まれたひとつひとつのエピソードや、これがダンスだと思った瞬間について、話しだすと止まらなくなりそうですね。ぜひまたお会いした時に続きを！

では、ここでの最後の質問です。竹中さんにとって、ダンスで人と関わるということは、どんなことですか？

竹中：いくつかのアイディアを試しながら、その時間と空間の中で、共に生きること、でしょうか。

自分が踊ろうとするとき、何を拠り所になっているか…。

今では自分なりに答えを探そうと試み続け、そのヒントくらいには辿りつけているように感じています。が、長い間、そこには辿りつけなかった。そんな時に自分にとって、一番わかりやすかったのが、他人の力を借りることでした。

他人の力を借りるとは、どこに人がいるのか、その人がどんなエネルギーを持っているのか、どう動くのかを感じて、それに反応していくことです。ベストブレイスのメンバーもそういう形で自分の動きを創っていくことから始まっていると思います。

ご質問への答えは「人と関わることは動きそのものの創出」かな。



◇第20回舞踊学会定例研究会のお知らせ◇

第20回舞踊学会定例研究会

開催日：2015年6月7日（日）9：30～17：00 会場：日本大学芸術学部江古田校舎

内容：①定例研究会（9：30～）：一般研究発表

②若手研究者によるシンポジウム「アジアにおける伝統の再創造と再構築」（14：05～）

受付開始：9：00 東棟2階 E-207教室前

■一般研究発表

会場（東棟2階 E-207教室）

時間	発表者	タイトル	座長
9:30-10:15	近藤洋子 (民俗舞踊研究所「舞スタジオ」)	“いのち”を育む民俗舞踊の仕組み	遠藤保子 (立命館大学)
10:15-10:45	小林敦子(明治大学情報コミュニケーション研究科博士課程後期)	「阿波踊り」における「女踊り」および「女の男踊り」の確立とその要因	猪崎弥生 (お茶の水女子大学)
10:45-11:15	石坂安希(早稲田大学大学院文学研究科演劇映像学コース日本演劇学専攻博士後期課程)	白井鐵造によるレビュー『花詩集』の上演意識ー東京宝塚劇場開場(1934)をめぐってー	古井戸秀夫 (東京大学)
11:15-11:45	吉田明子(日本大学)	教員養成課程におけるダンスの学習内容について ～アレンジの工夫 4象限の左回りループ～	八木ありさ (日本女子体育大学)
11:45-12:15	安達詩穂(日本女子体育大学大学院スポーツ科学研究科修士課程2年)	コンテンポラリー・ダンスの社会的役割に関する一考察 ～ワークショップ参加児童の内的態度の変化から～	村田芳子 (筑波大学)
12:15-13:15	＜昼休み＞ 【理事会】西棟2階第3会議室		
13:15-14:00	鈴木晶(法政大学) 海野敏(東洋大学)	パリ・オペラ座のバレエのレパートリー、とくに上演頻度上位の経年変化ー全上演記録の分析をもとに	森立子 (日本女子体育大学)

※それぞれ30分発表の場合は15分の質疑、20分発表の場合は10分の質疑となります。

<14:00-14:05 移動>

■若手研究者によるシンポジウム「アジアにおける伝統の再創造と再構築」

会場：東棟1階 E-102教室

司会：川島 京子(早稲田大学文学部助教)

時間	発表者	タイトル
14:05-14:25	竹村嘉晃 (人間文化研究機構地域研究推進センター研究員)	「伝統」を支える多元性 ーシンガポールにおけるインド舞踊の発展と移民・国家・多文化主義
14:25-14:45	木村理子(東京外国語大学外国語学部非常勤講師)	民主化後の「伝統文化」の継承 ーモンゴルのチャム・ダンスを事例としてー
14:45-15:05	波照間永子 (明治大学情報コミュニケーション学部准教授)	「男芸」(女形)から「女芸」へ ー女性舞踊家のオーラル・ヒストリーー
15:05-15:35	討論	
15:35-15:45	＜休憩＞	
15:45-16:05	高橋京子(フェリス女学院大学文学部准教授)	インドの「伝統的な」マーシャルアーツ、カラリパヤットをめぐる現状 ピチェ・クランチェンとタイのコンテンポラリーダンス
16:05-16:25	岩澤孝子(北海道教育大学教育学部准教授)	
16:25-16:55	討論	

16:55-17:00 ご挨拶 柴眞理子(舞踊学会会長)

掲示板

■クリエイティブ・アート実行委員会

◎Adam Benjamin 振付公演

日程:7月19,20日 場所:東京芸術センター(ホワイトスタジオ)

◎サマー・アート・スクール2015

ひとりひとりが創造的な自分自身を“探検する場”としての各種アート・ワークショップを提供します。障害の有無を超えて共に創造するプロセスの中でそれぞれの異なる感性や創造性を分かち合い、学び合うことによって新しいアートの可能性を探ります。

①サインマインド・ワークショップ

日時:8月1,2日(10:30~16:30)

場所:芸能花伝舎

講師:井崎哲也(手話通訳付き)

【成果発表パフォーマンス:8月2日16:00~】

②関わりが生むダンス・ワークショップ

日時:8月8,9日(10:00~12:00/13:30~15:30)

場所:(8日)月島社会福祉会館、(9日)日本橋社会福祉会館

講師:鈴木ユキオ(響-Kyoのカンパニーメンバーも参加)

【成果発表パフォーマンス:8月9日15:30~】

③創造的な声と動きのワークショップ

日時:8月15,16日(10:30~17:00)

場所:芸能花伝舎

講師:菅田真理、ディートマー・エダー

【成果発表パフォーマンス:8月16日16:30~】

④「つくる気持ち」ワークショップ

日時:7月25日(12:00~13:00/14:00~17:00),26日(13:00~16:00)

場所:芸能花伝舎

講師:深沢アート研究所、山添Joseph勇

⑤視覚を越える造形ワークショップ-触覚を探索し、質的イメージを作品化する

日時:8月22,23日(13:30~16:30)

場所:都内

講師:渡邊淳司

※各回定員あり(予約制)

〈申込み・問い合わせ先〉

クリエイティブ・アート実行委員会 URL: <http://www.Musekk.co.jp>

住所:〒107-0052 東京都港区赤坂6-2-5 方栄ビル201

TEL:03-6426-5182

E-mail:musekk@aol.com

■SOMA project

ピナ・バウシュ出身ダンサーと日本のアーティストにおける二つの世界のコラボレーション

構成・演出:Fabien Prioville

日程:8月24日~30日 場所:あうるすぽっと

事務局便り

会費納入のお願い

会員の皆様に向けて、今年度（2015年度）の会費納入のご案内を5月下旬に送付させていただきました。

学会の活動は会員の皆様から納入いただいた会費で運営しております。ご理解、ご協力の程、どうぞ宜しくお願い致します。また、現在事務局では、会員の皆様それぞれに、過去5年部にさかのぼった会費の納入状況をお知らせするとともに、未納分の精算をしていたたいております。おかげさまで順調に会費納入率が向上しております。ご協力いただきました皆様、誠にありがとうございます。この他、会費の納入につきましてご不明な点がありましたら事務局までご連絡ください。

会員名簿閲覧等

会員の皆様には、学会HPのWeb会員名簿から、IDとパスワードを用いて名簿を閲覧していただくことができます。IDとパスワードについては、メーリングリスト登録会員対象に2015年2月26日付けで配信されました【舞踊学会ホームページ、リニューアル作業完了のお知らせ】という標題のメールをご参照下さい。

また、会員情報更新をご希望の方は、同様にHPの会員情報の変更申請から入力していただくことができます。会員名簿への掲載可、不可を選択できる項目については、その扱いの変更につきましても、このフォームをご利用ください。取りまとめ作業の都合上、ご入力いただいた情報がWeb名簿上で反映されるまでには時間を要します。予めご承知おき下さい。

舞踊学会事務局

〒157-8565 東京都世田谷区北烏山8-19-1

日本女子体育大学 松澤研究室

Tel&Fax:03-3300-2423

E-mail danceresearch.info@kagoya.net

【編集後記】

今号では、興味津々の領域を取りあげてみました。こうした研究の存在を識ること、それがダンスの見巧者へと導いてくれるような気がする。（なぜだか） 大貫秀明

今回は、「あの人にこの質問を」のインタビュアーとして、八木ありさ先生にもご協力いただきました。本当に有難うございました。 森立子

子どもが生まれました。よりよい世界になるよう祈りつつ、自分に何ができるだろうと逡巡するこの頃です。今回も勉強になります。 弓削田綾乃

「生」への感謝をあらためて振り返るよい機会を与えていただきました。 高橋系子

ニューズレター第8号

発行日：2015年5月30日

編集：大貫秀明 森立子 弓削田綾乃
高橋系子 仙田麻菜（編集補助）

発行者：舞踊学会（会長：柴真理子）

ご意見、ご感想、掲示板への投稿希望は以下のアドレスまでお願いいたします。

ニューズレター編集委員会

danceresearch.newsletter@kagoya.net